

ベームに於ける七つの性

阿部行人

ヤコブ・ベームの神祕主義思想は、概括的に言つて自然哲學的であり、且つ主意的である。即ち、自然界一切に眼を注ぎ、其處に神的なるものを見出さんとした意味に於て自然哲學的であるし、神性の發展の歴史の中心を神的意志に置き、また惡の原理を以て、その神的意志に反逆する自立的な意志と見た點に於て主意的と言へるであらう。前者からはその汎神論的な面を取出すことが出来、後者にはその人格神論的な面を代表させ得るが、この兩者の重なるところ、その神は必然的に包括的にして力動的なる性格を具へざるを得ないし、自然は神に抗ひつゝ、而も神と歩みを共にしなければならぬ。もともとベームの思考の動機となつたものは、固より自からの魂の救濟であり、神の國を獲るの手段であつたのであらうが、その神の生を生きつゝ神を所有せんとする彼の意圖は、次第に深い形而上的な思辨をひき起して、結局

神の誕生、世界の形成の問題にまで溯らざるを得なかつたのである。かくして彼の中心課題となつたものは、何よりも先づ神の自己顯示の問題であり、創世の問題であつた。神の存在の根源とは何であるか、世界及び罪惡の根源は如何なるものか、神は如何にして世界を創り、また何故にその中に惡を入れたか等の問題は、すべて此處に歸着し、これに含まれると言へよう*。のみならず、我々が如何にして救濟されるか、その爲に我々は如何に爲すべきかの問題も、ベームに於ては、神が如何にして墮落せる被造物の心の中に再生し得るかという問題に端を發しなければならぬ**。何故ならば、神の立場から事物を見るといふことは、畢竟神の生への再生に外ならぬからである。一般にベームの哲學は Classification の哲學ではなくて、Construction の哲學であると言はれてゐるが、この場合、その構成とはそのまゝ神の作用を示す

ことであり、逆に被造物の立場から言ふならば、それは神の作用に與かることの中にあると言へよう。そしてそれがまた、やがて神の人格の形成につらなつたのであつた。

* ベーメに於ては、自然が神なのではなくて、神自身が凡てである。併しながらその創造・作用は、時間的な行爲でないことに注意しなければならぬ^②。此處に述べる七つの性の發展のプロセスもまた時間のうちにあるのではなくして、永遠のうちある。即ち、永遠性に於ては、世俗的な先後・繼續はなく、すべては同時的であり、各々の性は互に他の中に於てある^③。

* * 従つて「ベーメの倫理學の唯一の原理は神である」^④ということが出来る。スピノーザもその倫理學を神から始めたけれども、兩者の神は、もとより内容的に大きく距つたものであると言はざるを得ない。ベーメの立場を受けた後年のシェリングが自由論に於てスピノーザ的汎神論を批評しているのは周知の通りであるが、要するに、有限なるものの永遠に一致するものへの還歸を説いたスピノーザの神が、即自然として、非人格的な、固定的な神であつたのに反し、逆に永遠に一致するものから有限なるものの出現を示したベーメの神は、言はば自然とともに成長する、力動的な神だったのである。

ベーメに於ては、神が、その内的本質に於ては「無」(Nichts) または「無底」(Ungrund) であることについて

は以前に少し觸れたが、それが lebendig な Person としての神に發展し顯現するためには、彼の所謂對立の法則が適用されねばならなかつた。神のうちに於ける闇の原理と光の原理、real なものと ideal なもの、然りと否、此等の對立に於て一切はあらはとなる。すべて對立の度は實現の度の尺度なのである。ベーメ程に、存在の法則としての Antithese の意義を高調した者は少いであらう。一なる神のうちに於て、自らを顯示せんとする明るい原理と、それに對立抵抗し再び暗い世界に引戻さんとする暗い原理と、この二つの矛盾的對立によつて神は具體化して行くのである。その具體化のプロセスに於て、我々が此處に取上げんとする七つの性があらはれるが、それはまた永遠なる自然の性と呼ばれるところのものであり、これら七つの力を藉らずしては、自然に於て如何なるものも形を成すことは出来ぬのである。自然の創造・形成は、畢竟神の顯示に外ならないのであるから、この七つの性は、神的なる力の具體化であり、或は神の肉化の過程として考へられるのであるが、それらのうちに於ても、先に觸れた内的對立——和解的統一の原理は働らくであらう。

それ故に、七つの性は一方に於て自然の構成要素とし

ての要素的な性格を持つとともに、他方には精神的世界の構成要素としてのすべてを覆ふ原理的な性格を持つのである。前者は暗い低い面を、後者は明るく高い面を代表すると一應考へられるけれども、併しこの兩者は全く對立的で相容れぬといふのではない。むしろ兩者は衝突しながらも互に牽引し合ひ、反撥しつゝも求め合ふのである。「その各々の性は夫々獨自の特性を持つてゐるにも拘らず、それ等は一つの調和的全體を形成し、各々が他の六つに依存し、或ひはそのうちに存する。それ等は、我々の異なる感覺の如くに、同時的にはたらき、最も高いものから最も低いものに至るまで、すべてのものに行き互つてゐるのである」。即ちこれ等七つは、一つ一つがシンボリックに言ひ表はされたものであるとともにリアルな要素として、各々對立し合ふ神的なエネルギーとして而も神の自己顯示といふ一つの目的に向ふべく調和してゐると言つて差支ない。それは彼の所謂無底から世へと進むところの原動力なのである。

* 七つの性は、——ベームは、その時々々に於て、性質 (Qualität) 形姿 (Gestalt) 特性 (Eigenschaft) 本質 (Essentie) 力 (Kraft) などと種々の表現をとつてゐるのであるが——神性をあらはす性質を持つてゐる以上、それを七つに限るといふことは必ずしも適當ではない。神は時間的な始元も終結も

なく、神性の發揚は本來的に無窮であり、unzählig であるべきだからである。ベーム自身もこの點に關しては、「神性が限界點にあるかの如くに理解さるべきではない。神的特質に於ける神の知恵と力とは、極限なく、數へられず、言ひ表はし難いものである。私はただこれらの特性について、神が如何にして自身を、内的及び外的世界を通じて顯示するのであるか、その顯示の最も高貴なる形姿とは如何なるものかを書いてゐるに過ぎない」と言つてゐるし、また彼の後期の書の中には、これらの性を必ずしも七つには限つてゐない。

従つてベームに於ける自然の七つの性の教説は、重要でもあり有名でもあるのであるが、また極めて理解し難いものである。この教説が、いや彼の神祕説一般が何故に難解であるか、その理由として通常擧げられるのは

- 一、彼が個々の敘述をするために概念規定を用ゐることをしてしないで、自然的な事物や感性的諸性質を好んで多く用ゐてゐること。

- 二、彼の思想、特に自然哲學の部分に於ては、鍊金術者パラケルススの影響を強く受けてゐること。

- 三、感性的な表現と宗教的な表象とが混交し合つて、極めて象徴的な表現をとつてゐること。

- 四、表現が唯一の形式に止つておらず、各處に重複が見られること。

等の諸點である。これ等はまたベーム哲學全般の特徴と見られるであらうが、約言すれば、ヘーゲルの言ふ如くベームに於ては體系的な敘述がなく、またそれを期待してはならないこと、さうして思想の形式が缺如してゐるにも拘らず、しかも思想に於てのみ、彼の統一が捉へられなければならない點に、その困難があるのであらう。^⑤併し我々は、此處で一應ベームの七つの性の夫々について考察し、その關係について辿つてみなければならぬ。

ベームの七つの性の教説が、ユダヤの神祕思想、カバラ (Kabbala——傳説の意) の影響を受けていることは、諸家の一致して認めるところである。カバラの中心をなすものは流出説であるが、原始存在としての神の流出たる十個の創造的宇宙力セフィロット (Sephilot) を考へてゐる點、ベームの七つの性に相應するであらう (ユダヤに於ては、その初期には七、後には十の數字を重要なものとした)。その他にカバラに於ては、世界を右 (光、純粹) と左 (闇、不純) との二つの側面に於て考へ、二元論的な色彩が強いことや、世界創造の爲の神の自己消去的な行爲 (自己集中化) と流出説 (自己擴散化) とが混交し合つて、創造が成立して行く等の考へ方は、ベームのそれと共通のものと云へるであらう。また先に述べた十個の宇宙力が、不變にして完全なる超越界を形成し、之について純粹形相の世界、天界及び天使の

世界、物質的對象の世界が流出するのであるが、ベームの思想がそれから影響を受けていることは十分考へられる。尤もベームの思想が流出説であるか否かは問題であつて、例へばマーテンセンは、ローの流出説なりとするのに反對して、流出説が神以外のものから或るものが導き出されることは決してないとするれば、其處には神と conflict するもの、道德的惡の問題は出て來ない。従つてベームの考へ方を直ちに流出説と見なす譯には行かぬと述べてゐるが、これについては別に検討を要するであらう。

永遠なる自然の第一の性は欲求 (Begehren, Begierde) である。それは何ものかを目的として働らくもの、或ひは何かであらんとする志向性を持つものではなくして、盲目的な、内へ向つて働らく力であり、あらゆるものをそれ自身に惹きつけんとする欲求であり、牽引力である。それは言はば憂鬱な、しかし峻嚴な、己れの周圍に對抗してたゞひとりであらんとする性であるといつて差支ない。「あらゆる欲求は、欲する意志のうちにある處のものを惹きつける」^⑩。従つてそれ自體、收斂的な、一種のエゴイステイックな傾向を持つてゐると言へるであらう。「欲求のあるところ、欲求はすべてを自身にひきつける、そして欲求のうちにひきつけられたものは、意志を満た

し、また欲求自身も満足する^⑩のである。それ故に、この第一の性は、意志をして意志たらしめる原型的なものであるとともに、また意志が外部に向つて働らく力に對する抵抗性でもあるのである。かくして「この第一の性質は、磁氣の如き欲求であり、意志の包括性(Einfaßlichkeit)としてある。といふのは、意思は何ものかであらんと意志するが、それから何もかにならしめるものを持たぬ、それ故に意思は自らを導いて自らの快適に至り、自らに迫り自らを或るものに至らしめる、併しこの或るものは、單に磁氣的なる飢えに過ぎず、堅さと同じく苦澁があり、そこから粗硬、寒冷、本質等が生ずるのである。かくる刻印、または牽引は、自らを蔽ひ自らを暗黒に至らしめる。この暗黒はまた永遠なる時間なき暗黒の基礎なのである。この鋭敏さによつて、この世界の元初には、鹽、石、骨、それに似たあらゆるものが成り立つのである」。

第一の性が、あらゆるものを自身にひきつけんとする *astringent* な收斂性を有してあるとするならば、第二の性はそれとは全く異なる逆の方向、——外へ擴がらんとする志向性を、*expansive* な摩擦性・分化性を持つてゐると言へよう。固よりそれは第一のものとは反對のもの

であり、それに對立し反撥するものではあるけれども、併し全く別の性、基盤を異にしたものといふのではない。否、むしろ兩者は離れ得ずに、同じ基盤の上に立つものなのである。「永遠なる自然の他の特質が第一のものから生起する。それは鋭どきに於ける「延長」(Ziehen)、或ひは「運動」(Bewegen)である。といふのは、磁氣は硬さを成し、運動はこの硬さを再び破つて、かくて自らのうちに於ける永續的な鬭争となる。何故なら欲求が把握(fassen)するもの、或るものを成さんとするところのもの、それが形態にならんとする動きを打砕くからである」^⑪。此處に、自體を目的としてとることに満足せずして外部に向はんとする(第二の)性に對し、それを内に引戻し、永遠なるものと静止に還らんとする(第一の)性との相互作用が現はれる。後者が強ければ強い程、前者もまた強く働らくのである。收斂(Anziehen)、吸收(Einziehen)に對する延長(Ziehen)のはたらき、作用と反作用との相關々係は、ペーメに於ては常に現はれる基本的な考えである。そしてこの關係の結果として出て出るのが、第三の性たる「苦悶」(Angst)なのである。

* 第一の性の閉鎖的な堅さに比して、第二の性は鋭どき、棘にがさ、と呼ばれ、更に象徴的には木星(第一の性の土星、

第三の性の火星に對して)に例へられてゐる。またベームは、第一の性を鹽に第二を水銀に、第三を硫黄になぞらへてゐるが、それ等は固より化學的な概念ではなく、それ等のうちの物質的なものよりも高い具體性の中に自ら顯現して行く spirit として解さるべきであらう。しかし、後の第五・第六・第七の性の人格的な顯現に對して、第一・第二・第三の性の表現が極めて汎神論的であることは、注目されてよいと思ふ。

* * 第一の性と第二の性ととの gegensüßig な作用から成るダイナミックな體系が、ベームのこの教説に於て基本になると考へられる。「この二つの形態は永遠の本質であり、自分自らを作る永遠の紐帶である」。グルンスキイはこの二つの性のはたらきについて様々な組合せを考へてゐるが、併し結局その場合重要なことは、それ等が單に機械的な混合としてではなく、存在の誕生の原理として捉へられなければならない點である。さうしてこれは、七つの性全體についても言へることであらう。

あらゆる生は苦悶とともに始まり、苦悶とともに過ぎ行く。自然は常に Angst を包藏してゐるのである。それは第一の性たる欲求につらなつてゐる處の、或ひはその基調をなす Selbstheit に潜在的に存する苦悶であらう。既に述べた如く、第三の性は、conflict し合ふ前二者の、即ち in sich にあらんとする性と aus sich の傾向を持つ性と、求心力と遠心力とのコンビネーション

である。二つの性の相關的な反撥と吸引とは休むことなく續けられ、その閉鎖性と擴散性とに立つた、言はば何處にも持つて行き場のない、自由を奪はれた運動の狀態が第三の性であると言へよう。従つてそれは逍遙的であり、煩悶的であり、苦痛の源泉、不和であり、「前の二つの性から離れて立つことの出來ぬ negativ な統一」であるとともに、より具象的には「感受性」(Empfindlichkeit)として現はれるのである。もし第一の性が「意」の原型を示し、第二の性が「知」の原型をあらはしてゐるとするならば、第三の性はまさしく「あらゆる感性の原因」であると考へられよう。併しながら彼の場合、この三者が同列に並んでゐるのではなくて、何といつても第一の性がその基調を爲すことは言を俟たない。何故ならば、「鋭どさや動きがなかつたならば、感性もまたないであらうから」。「我々は情意(Gemüt)の深い意味のうちに、欲求が強く吸引的であることを見出す」——我々は此處にもベームの汎神論的な性格を見出すことが出来るであらう。

以上述べた三つの性は、總じて自然的な性格が濃厚であり、其處には神的なる力は未だ顯には働いてゐないかの如くに思はれる、否むしろ神の自己顯示とは對立す

るかの如く考へられる。それ故にこれらは屢々暗い面を代表するものとされ、或ひは消極的な働らきをなすものと見做されるのである。それは、神性の自らを顯はし出さんとする方向とは逆の方向、即ち、無へ歸らんとする面、神の自然(Natur Gottes)の作用と相應するであらう。

が併し我々は、かゝる暗い欲求に於て、無底の意志(父神の意志)が新しい形姿を以て我々の前に現はれたのを見た。それは自然に於ける暗き三元(Ternar)を形成し、その「意思の自己暗黒化」(Selbstverfinsternung des Willens)に於ける結果は、救ひなき自己矛盾であり、苦悶であつた。換言すれば、自然は無から昇り來つて此の點までは到達するが、此處で——第三の性に至つて——その力は止るのである。「その内部の矛盾は堪へ難い苦悶ではあるけれども、自然はそれを廢めることは出来ない。自然をその状態から解放するところのものは、自然の内部に於ては何もない、救ひはたゞ自然を超えた神、或ひは永遠の自由からのみ來るのである」^④。かくして茲に、暗い自然的なるものと明るい精神的なるものとの接觸が始まる。即ち、「自然が自己自身のみでは十分でないことが明らかになるが故に、自由に對する望みが生れる。また一方、精神と自由とは自らを明らかにし實現せんが爲に

自然を必要とするのである。かくして自然と精神とは互に近づき合ふ。併し自然は獨特の慣性の力を有するが故に、精神を求めてゐながらも精神と衝突するのである、そこに新しい現象が生ずる」——これが兩者の連結をなすところのもの、即ち第四の性に外ならない。

第四の性は、後に述べる如く、七つの性のうちの中心をなすものである。それは七といふ數の眞中に位置するばかりではなくて、暗い原理と明るい原理とを結ぶものであり、自然と精神との接觸の表示としてあるからである。それは「火」(Feuer)、「太陽」(Sol, Sonne)と呼ばれるが、その火はもはや暗く燃え熾る火ではなくして、「柔和な光を擴げ、暗い原理を變え、對立する諸力の争を終らせる」ところのものであり、其處に於ては、「暗・粗・激などの自然のエゴイスティックな傾向をつくり出したもの凡ては吸収され、無に還元する。闇黒は啓かれ生々とし、光の中心たる火を明らかにする」——かくの如き火なのである。それは言はば lebendig な神性の起源であるとともに、眞に有力な中心であり、これに比すれば前の三つの性は、單に抽象的な動きに過ぎないときへ言へるであらう。併し火が全く相反する二つのものを統合し得るのは何故であらうか。それは火がその二つの

ものになり得る要素を持つてゐるからに外ならない。「神に於ては異なる二つのものが一つである。光の力はベームに於ては神的顯現の總和である。活らき、顯示、行爲も同じ概念である。その統一はそれが統一する故にのみ爲され得る。それ故にそれは統一するところのものを持たねばならない。この場合の炸裂をベームは火の要素と名付ける。……この炸裂は暗き領分に於ては驚愕であり、光の領分に於ては展開であり、歡喜である」。従つて、火は二つの領分の双方とも要素を自らに有して居り、またそれ故にこそ兩者の統一が可能なのであるが、それを七つの性に關して言へば、火は最初の三つに關しては怒りの火であるが、後の三つに關しては愛の火であり、此處に七つの中心をなす第四の性の意義を明らかにし得るのである。

「根本の状態は二つの始元のうちにある、一は牽引であるところの欲求に於ける特性として、また、一は外向つて進み行くところの光または自由の特性に於てである」^④。前者(欲求)は、先に述べた如く、運動に、更には苦悶に迄進展したが、結局其處ではその中に後者(自由)を共有せんとして果さずに終る。第四の性はこれら二つの根本の状態の觸れ合ふ場として考へられるが、また逆

に今迄自然的な暗黒の火、或ひは潜在的な火としてあつたものが、此處に明るく轉じて、光への基體として顯はになつたとも言へるであらう。何故ならば「火は生を作り、動きを成す」^⑤のであるから。また、魂に關しても、「その根本の形態は火のうちに在り、火は魂の生なのである」^⑥から。元來、火は一面に於て暗き世界の代表として、明るい世界の象徴たる光に對立するとみなされ、閃光(Flehen)は、「永遠なる自然の中に高められ進み行く過程の頂點」^⑦として考へられる。併しながら我々はまた、火を通じてのみ光に到り得るのである。さうして光の生(Lichtleben)に於ては、自然はこのより高い生に對する實在的基盤としてあらはれて來る。かくして自然は神的なる光に従ひ、暗い原理は明るい原理に向ふけれども、また前者が後者を可能にする面をも見落してはならない。「自然は、そのはらんでゐる果實を生み出す力を持たぬことを感じつゝ働らき苦しむ。突然しかし超自然的なる力が起り、苦惱と歡喜とが瞬時にして打合ひ、閃光が起り、闇を通つて光へと新しいものが入り込む」^⑧のである。さうして茲に第二の原理の支配するベームの所謂「喜びの國」(Freudenreich)、「天使の世界」(Engische Welt)が現はれるのである。

かくて第五の愛 (Liebe) の下に於て新しい集中が行はれる。それは精神の統一的な力であり、この下に諸力はすべての暴力を捨て、互に楽しみ合ふ。其處ではすでにエゴイステイックな感情は去り、夫々が孤立してあらんとする個々の統一の代りに、互に求め合ひ、全體に一致せんとする滲透的な統一が之に替る。即ち、「愛の油は諸原理を結び、解き、形造り、調和せしめて歡喜を完成に至らしめる」^⑧のである。この新しき集中たる「愛の擴がり」・「愛の誕生」に於ては、「峻嚴さは全く柔和になり、全く明るくなる。また、辛苦は此處に至つてまさに喜びと呼ばれる。何故なら愛は上昇であり運動なのであるから」^⑨其處では子音的な、兇暴で棘のある、或ひは閉鎖的な「恣意」は棄てられ、それに代つて母音的な、繊細な本質が、第二の原理としての自由の性のはつきり顯はれて来る。そうしてこの「靜かなる自由」が、我々すべてに對して「輝き」となり、「歡びの國」となるのである。かゝる「光の中に於て鳴りひびく好ましい調子」ものは、闇の中に於ては全く粗野に、角々しく響く、それはいはば正しい響きのない打叩の如くである^⑩。

此處に既に第六の性が示されてゐるといつて差支ないであらう。それは今迄のあらゆるものが高められた形

態、即ち音響 (Halt) であり、言葉 (Word) であり、神的な言葉の響き (Schall des göttlichen Wortes) である。それは「あらゆるものが響き、鳴りわたり、そこから言語が、あらゆるものの區別が生じ、聖なる天使の和音と歌とが出て来る。その中に於ては、あらゆる色彩と美とが形成され、神の歡びの國がある」^⑪状態であり、先に述べた「五つの特性が第五の性としての愛の欲求 (Liebe = Begierde) の中に合して第六の性を成す。即ち Ton であり Stimme である。それは火氣の強い光の欲求を精神の水で包む精神性のあらゆる表示としてある」^⑫のであつて、第五の性たる愛が多數の統一であるとするならば、第六の性は統一そのものの中心をなすもの、或ひは中心に於ける智知的なるものであると言へよう。もとより「その響きは全地にあまねく、その言葉は地の極にまで及ぶ」(詩篇一九ノ四)けれども、かゝる神の内的生に於ける顯示の聲は、外的にはあらはれず、人間の肉の耳に達しはしないで、天使のみがそれを聞き得るのであらう。それは言はゞ lebendig な神的な響きとして、^{*}はじめに言葉は神なりきりなのである——即ち、愛に於て集中され引寄せられた諸力が、知的な生となり、判明にして聞えるものとなるのである。

*言葉は神の諸力の外發であり、その發言は神の實存的顯示である。従つて茲に神は始めて *Leib* として顯われ、神的なる力は具體化されると言へよう。その意味では、ペーメに於ては言葉は七つの性の一つ以上の重要な意義を有すると解せられる。

最後の性は、一言にして言ふならば、前六者の集合せられた調和的全體である。「神的な力に於ける神の、第七の精神は「體」(Körper)であり、それは他の六つの精神から生れる。その中に於てあらゆる天上の姿があり、あらゆるものが創られ形成され、あらゆる美と喜びとが起る。それは自然の正しき精神である、いや自然そのものである……天そのものがその中につくられ、全き神のあらゆる自然性がそのうちに在る」^⑤のである。さうした神の本體はまた神の本質(Wesen)^{*}でもある。其處ではすべてが生かされ、調和する。神の顯示を完成させるには互に作り續け合つてゐた凡ゆる力が調整されなければならぬ。より高きものが低きものを統べるならば、低きものは滅し去られる譯には行かない。何故ならば、より低きものは高きものの *Reinheit* であり、それを支へるものであるから。またその支持なくして、高き要素も消滅して空虚な場に至るであらうから。それ故に、永遠なるも

の顯示がそれによつて最終的に完成せられるところの調和の精神があらはれなければならない。此處に於て我々は神的生命の現實的・本質的狀態——全き神性の作用と本體とを見るのである。かゝる本質的なるものは、現實に形造られた智慧であり、生であり、形體的存在であると言へよう。「神が最初から鏡の中に持ち續けた像、その永遠なる *Imagination* の中に保ち續け、また現實に持たんとした像は、かくて實現されるのである」^⑥。神の榮光の王國は此處に顯現する。そこには凡ゆる個體の自由が、完全な生育と和解せる調和がある。この榮光の國では、すべてのものはあらゆる抑制から自由であり、その本性に従つて神を求め、明らかにし、神を所有する。もとより「神の國は内面的に我々の内に生れなければならぬ。さうでなければ我々は永遠の眼で天使の世界を見ることが出来ない」^⑦のではあるが。

*此處に言う本質的なるものは、もはや單にイデアールなものではなくして、むしろレアルな完全性の中にある。Wesen という言葉は、ペーメに於ては、他にも數多く使はれてゐるが彼の場合、それは事物の内なる中心というよりもむしろ生成の過程を完成し、*gegenständlich* になつたところのもの、物質的にも *greifbar* になつた具體性を意味してゐる。その點で *Wesen* は *Körper* と殆ど同義語と考へられよう。

以上の七つの性をバーデルに従つてまとめてみると、^⑧
 一、永遠なる言葉の欲望。永遠なる無の或るものへの括

約 (Fassung)

二、欲望の自己運動。

三、感覺性。衝動。不安。

四、火。精神としての欲望。火に於て魔術的形態は生ける精神像の形をとる。

五、光。愛。こゝに欲望は精神化され、以前に分れてゐた愛と力とは綜合される。

六、歡喜の出發。見出されしものの歡びの叫び。即ち音響、言葉。

七、諸力の形成されたる體。

これら七つのものは、既に述べた如く、互に夫々が相覆い活らき合ふのであるが、その中で第一の性は凡ての源泉として第一・第二・第三の「より暗き三元」(Instere Ternar)の中心をなし、第七の性は凡てがそれを目指す目的として第五・第六・第七の「より明るき三元」(Lichtere Ternar)の中心をなす。さうして第四の性がその中間に於て相互の媒介をなすとも考へられよう。それ故に、或る意味では第四の性がこれ等七つの性の中心點に立つ最も重要な存在であると見なされる。七つの性は直線的・

並列的にあるのではなくて、言はば「火」を頂點とする孤の上に在る。^{*}さうして火はその何れの方角にも向いて居り、Lichtfeuerであることもまた Finsterfeuerである。即ち、「光の中に於ける火は愛の火であり、柔和なる心、喜びの國への欲望である。闇に於ける火は不安の火であり、苦痛の多い、敵意を含んだ、本質に於て背反的な火なのである」^⑩。が併し、火はかゝる元初性の故に第一の原理により親近性を持つ。先に言つたより暗き三元を統べるものは、潜在的な火なのであり、凡てのものを焼き盡さんとする zornig な性格を持つのである。かゝる火の力をベームは父神に於て考へてゐる。併し父神はまた、光の國の根元の力を形造るのである。「父は闇の國に對する絶對的な支配を持ち、自からよりその子を生む、即ち光の力を生む。闇に對するその極まりなき支配に於て、父は焼き盡す火であるが、彼自らより生める子に對しては、愛の炎に燃えて、いはば闇を支配する處の光に身を捧げるのである。光は併し再び火に身を委ね、その柔かき力は燃焼する父性の兇暴性を和らげる。かくして、二つの生の力は互に相入り相通じて働らくのである」^⑪。けれども父と子とのかゝる緊密な結合の原因は、第三の力たる聖靈の中に求められなければならない。^{**}

それは神性の力から同時に發し、前二者に入り通じて働らき、子(光)と父(火)とを合一せしめるものであり、兩者の調和として、光の外への發動——「光の放射力」として表はされる。この力もともと火の要素の中に、否、七つの性全體に於てあらはれると言へよう。

*グルンスキイは第四の性を $4(-) \cdot 4(\cdot) \cdot 4(+)$ として考え、 $4(\cdot)$ を頂點として $(-)$ には以下 $3 \cdot 2 \cdot 1$ がつらなり、 $4(+)$ には $5 \cdot 6 \cdot 7$ となる孤を考えている。即ち「永遠の紐帶の辨證法としての七つの性」の中心、その辨證法的發展の中心は火なのである。⁽¹⁰⁾

*ベームの如く、自らのうちで自らを區別する一という考へを中心によれば、極めて自然に三位一體説と結びつく。しかし神的自然と父・子・聖靈の關係については別に述べたい。

以上我々は、ベームに於ける神的自然の七つの性が如何にして一つのレアルなものに統合されるか、換言すれば、如何にして神自身のうちなるアンティノミーが解かれ、それによつて神が自らを實現して行くかを概観したのである。固より神は永遠であるが故に、その論理的發展は終了したのではない。我々は更に進んで、始めに述べたやうな、神の作用に與かる人間の實踐的立場に迄觸れるべきであらう。しかしその爲には、我々は溯つて諸力の根源たる無底的意志、すべてが未分なる一であつ

た状態、Ungrund についても尙立入つた考究を排はなければならぬ。何故ならば、前述の如く、ベームの全體系の中心は神の發展の叙述——それが本來一つの不合理であることを彼は認めてゐたにも拘らず——にあり、その結果、神性と人間性がキリストに於て全く一になるといふ根本原理に立つて、その上に一切の哲學・倫理學を積み重ねてゐるからである。けれども此處に残された問題については、別の機會に譲りたいと思ふ。

*ベームは言う、「讀者よ、私の書く處を正しく理解して頂きたい。我々の神の誕生について語る力を持たぬ——併し私は私の敘述が終りに達した時こそ、人間は自ら、自分が如何なるものか、また、最初如何なるものであつたかを知る筈である」⁽¹¹⁾。

註

- ① Bouteroux : Historical Studies in Philosophy, p. 178.
- ② W. R. Inge : Christian Mysticism, p. 278.
- ③ Martensen : Jacob Boehme (tr. in English) p. 50.
- ④ Petersen : Ethik Jakob Böhmes, S. 1.
- ⑤ 拙稿「Schelling に於ける Natur in Gott の概念」(大谷學報第三十四卷第四號)
- ⑥ W. P. Swainson : Jacob Boehme, p. 27.
- ⑦ Myst. Magn, 7. 17.

- ⑧ 岩波ローゼル全集「哲學史」下巻の二、ヤロト・ユー
 ⑨ Martensen & Swainson の通説の論 Grunsky の Jacob
 Böhme 論
 ⑩ Martensen : *ibid.*, p. 119.
 ⑪ Sechs theosophische Punkte, 1, 34.
 ⑫ Dreifaches Leben, 1, 27.
 ⑬ Clavis, 38.
 ⑭ Clavis, 39.
 ⑮ Martensen : *ibid.*, p. 24.
 ⑯ Dreifaches Leben, 1, 35.
 ⑰ Grunsky : Jacob Böhme, S. 136ff.
 ⑱ Grunsky : Jacob Böhme, S. 127.
 ⑲ Clavis, 39.
 ⑳ Dreifaches Leben, 2, 12.
 ㉑ Boutroux : *ibid.*, p. 195.
 ㉒ Boutroux : *ibid.*, p. 196.
 ㉓ Boutroux : *ibid.*, p. 196.
 ㉔ F. Baader's Werke XIII, S. 104.
 ㉕ Signatura Rerum, 3, 13.
 ㉖ Menschwerdung Jeou Christi, I, 5, 15.
 ㉗ Vierzig Fragen, I, 239.
 ㉘ Grunsky : *ibid.*, S. 152.
 ㉙ Boutroux : *ibid.*, p. 196.
 ㉚ Swainson : *ibid.*, p. 30.
 ㉛ Drei Prinzipien, 3, 17, 18.
 ㉜ Signatura Rerum, 3, 18.
 ㉝ Mysterium Magnum, 5, 20.
 ㉞ Aurora, 10, 1.
 ㉟ Signatura Rerum, 14, 32.
 ㊱ Aurora, 11, 1, 2.
 ㊲ Martensen : *ibid.*, p. 50.
 ㊳ Sendbrief, 19.
 ㊴ Baader's Werke XIII, S. 117.
 ㊵ Neue Wiedergeburt, 1, 19.
 ㊶ Petersen : *ibid.*, S. 14.
 ㊷ Grunsky : *ibid.*, S. 212ff.
 ㊸ Drei Prinzipien, 3, 1, 3.

〔本稿は昭和三十三年度文部省科學研究費による成果の一部
 である〕